

# 水曜日の恋人 2

*A y a m e e s Y u*

---

龍田よしの

*Yoshino Tatouta*

*ternity*



エタニティ文庫

賢者からの贈り物

331

八章	七章	六章	五章	四章	三章	二章	一章	序章
自覚	光芒 <small>こうぼう</small>	再会	残滓 <small>ざんし</small>	双嵐 <small>そうらん</small>	噂と驚愕 <small>まやうがく</small>	宝とゴミ	万華鏡	リミット
137	120	106	98	68	43	20	8	6

終章	十六章	十五章	十四章	十三章	十二章	十一章	十章	九章
	船出	一会 <small>いちえ</small>	千の夜	拔錨 <small>ばつちよう</small>	己心 <small>こしん</small>	勝負	呪文	我が儘 <small>まま</small>
323	314	305	299	288	268	199	187	146

目次  
水曜日の恋人2  
5

水曜日の恋人 2

## 序章 リミット

教えてくれたのはレンだった。  
マサシのバースデーで懲りた彩芽が、次のバースデーはいつで、誰のなのかと尋ねた時だ。

「次は九月三十日だよ。実はユウのバースデーなんだ」

「え？」

彩芽が固まる。右生の？

「それにね」

そこで言いよどんだレンは、ためらいながら付け加えた。

「水曜日だから。ゲームの最終日だよ」

声もなく瞳孔だけが縮まる。

『身体から恋ができるかどうか。三ヶ月の間にそつちが俺に惚れば俺の勝ち。惚れな

ければ君の勝ち』

三ヶ月の期限付きのゲーム、『水曜日の恋人』のリミットは刻々と近づいていた。

## 一章 万華鏡

袖池<sup>ゆずい</sup>彩芽が派遣社員として勤める会社の昼休みは、十二時からだ。チャイムと同時にランチを、休息を、おしゃべりを求めて従業員たちの群れはそれぞれ流れていく。彩芽はというと、同じ部署の女の子たちと一緒のことが多かった。仕切るのは大抵正社員である那智<sup>なち</sup>理恵<sup>りえ</sup>子<sup>こ</sup>だが、このところ彼女は多忙らしい。昼食時になっても、手を振って動かないことが増えている。

「ごめん。私、別口。またね」

彼女には彼女の都合がある。そう思って特に気に留めてなかったのだが。

「ねえねえ袖池さん。那智先輩、ハンティングされてるってほんとかな？」

近くのレストランでとりあえず食事を終え、コーヒーを飲みながら残り時間を計る。女の子のひとりに聞かれたのはそんな時だった。

「ハンティングって？」

「ヘッドハンティング。転職よ。聞いてない？」

「ううん。先輩が？」

「ヘッドハンティング」なんて言葉自体、小説とかニュースの中のものだと思っていた。彩芽が実際に身近で聞くのは初めてだ。

「あたしも噂聞いたわよ。昼休みに電話してるとかなんとか」

「あー、それでこの頃ランチに来ないんだ？」

それぞれが見聞きした事実で盛り上がる。

「でもでも。転職って何に？」

彩芽の問いに、女の子達の口は一段と忙しく回り始める。

「袖池さんは知らないよね。那智先輩ってもともと営業畑の人なんだって」

「そうそう。バリバリだったらしいけど、トラブって責任取らされたとか」

「でも責任って、元凶は当時の上司だったらしいじゃない」

「うん。女だから叩かれたんだろうって」

「ひどいね。うちの会社もまだそんなんだ」

「見ればわかるでしょ。上にいるの男ばかりじゃん」

彩芽は唾然として聞いていた。経理課の中でも飛び抜けた処理能力を見せていた理恵子。てっきりこの生え抜きだと思ってた。そんな過去があったなんて。

「だからやっぱり営業に未練あるでしょ。力あるだけに」

「聞いたところだと外資系だってよ」

「なら男女格差少ないだろうしね」

「いいなあ、頭良くて夢のある人は。ねえ、夢って持ってる？」

女の子の話はころころ変わってどこへ行くやら。

「そうねえ。入社当時ならともかく、ここまで来たら仕事ではねえ」

「無難なのは寿退社？」

「それって夢なの？ 誰々のお嫁さんってのならわかるけど」

「えー、誰の？」

ドツと沸く爆笑の中、彩芽は顔も心も引きつっている。過去の記憶が胸に痛い。

「私ね、実は夢ってあるんですよ。陶芸をね」

彩芽と同じ年の娘がためらいがちに、声を潜めて打ち明ける。

「ほんと？ 凄い」

「凄くないですよ。ほんとに夢。まだてんで無理。やっと講座のアシスタントぐらい」

「してるの？」

「会社にはれるとやばくない？」

「無給なんです。でも勉強になるから」

「ふうん。いいよね、夢あると。袖池さんは？」

いきなり振られて彩芽はギョツとした。

「あたしが？ 夢って」

「違うの？ 派遣ってことはやりたいことあるのかなって。多いでしょ、そういう人」

「あたしは違うの。時間の自由が利いていいのは確かだけ」

答えながらも彩芽は苦く濁った思いを噛みしめた。

「俺は昔、塾の先生にすごく助けてもらったんだ。そんな風に生徒を助けられるようになりたい。そんな場所を作りたい」

「修ちゃんももう助けてるよ。塾にだつて募ってくる子いっぱいいるし」

「いや、やっぱり限界あるんだよな。その組織の方針ってのがあるし。思う通りにやるには自分が上に立たないと駄目なんだ。もつと資金貯めなきゃなあ」

「修ちゃんならできるよ。あたしにも協力させてね」

「……彩芽、おまえにだつて夢はあるんじゃないのか？」

「あたしの夢は修ちゃんだよ」

「でも」

「あたしも頑張る。いいよね？」

かつて好きだった人、自分を置き去りにした人と語り合った夢を思い出す。

甦る記憶に何度眠りを妨げられただろう。目覚めると必ずドクドクと心臓が脈打っていた。涙を押し出すポンプみたいに。

彼の夢が自分の夢。それでいいと思っていた。男を支える女とはよく聞く話だ。助けになれることが嬉しかったし、一緒に夢を見ているつもりだった。そんな自分を彼はどう思っていたんだろう。

就職して四年で六百万貯められたのは、実家にいたから。生活の心配をしなくてよかったからだ。二人兄妹だが兄とは年が離れていて、一人っ子のように育ち、可愛がられた自分。無駄遣いしない娘は誉められてもけなされることはなく。まさか彼のためだけに家族は思ってもいなかったに違いない。

塾の講師と生徒として出逢ったせいも、彩芽が卒業、就職してからも、ふたりの関係は何となくオープンにしないままだった。彼は忙しく、デートも頻繁とはいかなかった。彩芽にすれば、そういうことも全て彼のためで。無駄遣いしないことにストイックな喜びを見いだしていた気がする。

彼のために尽くす。

言葉にすると陳腐だけど、酔っていた。そんな自分を彼も望んでくれていると信じていた。あれはひとりで見えていた夢だったのだろうか。自分しか覗けない万華鏡のようなもので。

「彩芽ちゃん？」

かけられた声にハツとした。いけない、仕事 중이다。理恵子の心配そうな顔がすぐそこにあった。

「具合でも悪い？」

「大丈夫です、すみません。何か？」

「うん。週末、私休むから。仕事でちょっと頼まれてほしい件があるの」

テキパキと説明する理恵子に、彩芽はつい聞いてしまった。

「先輩、転職って」

周りには聞こえないような声は潜めたつもりだが、驚いた顔で口をすぼめた理恵子に彩芽は黙る。

「夕飯、一緒にどう？」

理恵子が小声で誘った。

「いいんですか？」

「うん。久しぶりにちよっと話そうか」

穏やかな笑みに頷きながら、彩芽の中に沈んでいく確信があった。噂は本当なんだと。

ゆつくり食べたその夜のイタリアンは美味しかった。理恵子はスパゲッティ、彩芽はフエツトチーネをメインにして、オードブルにサラダにスープ。この店はデザートがまた凝っていた。週替わりで新しくなるので毎週通う客もいるらしい。エスプレッソと一緒に出てきたのは、目にも楽しい二品。こんもりと卵形に盛られた洋なしのムースが、鮮やかなキウイとイチゴのソースに浮かぶ一皿。そして濃茶、薄茶、ワイン色の断面を美しく見せる三層のチョコケーキには銀杏のようなアーモンドが散り、雪を模したクリームが点々と添えられているもう一皿。

「綺麗ね。手をつけるのが惜しいくらい。何度か来てるのに初めて見るわ」

理恵子が絵画のような美しさにため息を漏らす。

「デザートなんだから、重要なのは味です。食べましょ」

決然とフォークを手にした彩芽にプツと吹き出して、理恵子もフォークに手を伸ばした。

「そりやそうだわ。いざ」

かくして描かれた二枚の絵は、残らずふたりのお腹に収められた。

「……いつ、辞めちゃうんですか」

空になったお皿が下げられたあと、落ちた沈黙を彩芽が破る。すでに決まったという前提での問いであって、噂の真偽は問わない。

「九月末、かな」

理恵子の返事も短い。

「すぐですね」

あと一ヶ月余りだと彩芽はほんやりと思った。カフェ風の店内を見渡した理恵子は、喫煙席ではあったが彩芽に断った。

「ごめん。一服させて」

「はい、どうぞ」

備えてある灰皿をそっと押しやると、コリツとテーブルをこする音がする。透明な円形で綺麗に磨かれた灰皿が、間接照明を淡く照り返す。煙草を取り出す理恵子の指先はパールオレンジ色だ。

「転職。前から考えてたんですか？」

雨だれみたいにポツリと彩芽が問いを落とす。理恵子が煙をふーつと吐き出す。その口元を彩る口紅も、オレンジ系で爪と合っている。

「ううん。全然」

やっぱり短く答えてから、煙草を挟んだ指は灰皿の上で止められた。ゆらゆらと揺れているのは煙なのか、煙草なのか、指なのかわからない。

「私が営業畑だったって話、聞いたことある？」



手元に釘付けになっていた視線が、理恵子の言葉で引き戻された。

「ちょっとだけ。すぐやり手だったって」

こないだ聞いたばかりの話を思い出しながら口にする、理恵子の顔が苦そうに歪んだ。

「ミスって、異動させられたって？」

「そんなことっ」

言葉がまずかったかと彩芽があわてるのを制して、理恵子は今度こそちゃんと笑った。

「いいのよ。ほんとだから」

「ほんとって？」

「入社以来ずっと営業だったの。短大出だったから、同期入社の大出の男性とかとはいろいろ扱いにも差があったし、水もあけられがちだったけど。とにかく面白かったし。好きだったから、がむしゃらにやっていた。成績が目に見えて上がれば、会社側としても評価せざるを得ないのよね。保守的でも」

トントんと弾いた煙草から灰が落ちる。当時の傷ついた理恵子の心のように、ほろほろと。口元に寄せられた煙草は吸われて、先が赤く焼けただれていく。

「上司も応援してくれてたし。…そう思ってたんだけど」

煙と一緒に苦い記憶を吐く。

「大きな失敗をやってね。会社にも少なからぬ損失を与えて。もちろん責任はとるべきだったけど。チームでやっていたのに、はっきり引責させられたのは、私ともうひとりの新人のみで。上司とか、立場が同じはずの同期とか、大しておとがめなしで」

理恵子が遠くを見る。過去を。

「目障りだったんだなって、わかった」

灰皿に煙草を押しつけ念入りに潰す、パールオレンジの爪先。

「で、経理部門に来て。生活あるから辞められなくて。このご時世だし、仕事変えるのもためらっちゃうし」

さらりと落ちる髪をかき上げる。

「一時期は荒れたわ。もちろん会社じゃおくびにも出さなかったけど。プライドあったから。でもオフはそりゃもう」

彩芽は言葉がなかった。仕事は真面目にやってきたけど、情熱を持ったことはない。自分にとってはお金を得るための手段でしかなくて。それが悪いとは思わないが、理恵子の気持ちはわからない。わかっただけであげられない。

「夢を見てたのよね。上に昇ってもっと大きな仕事って」

「夢？」

「うん。自分だけの力でって」

もどかしく思えた理恵子との間の壁が不意に薄くなった。彼女も万華鏡を見ていたのだろうか。

「やればやるだけ掴めそうな気がしてた。いくらでも」

弄もてあそんでいるライターは、カッチリしたシンプルな形と色で、理恵子らしい。

「ああ、アキラに逢ったのってその頃なのよ」

「へ？」

「バーで深夜飲みつぶれてたら、たまたまね」

「そうだったんですか」

「ほら、優しいし気さくだし。なんたって慰めるのは本職だし」

それは確かに。

「だからって、のめり込むこともできなかったな」

その口調はどこか寂しそうに聞こえた。ホスト相手に我を忘れてしまうには理恵子は頭が良すぎるし、自分がどういうことをしようとしているのかも見えすぎてしまうのだろうと彩芽も思う。

「でも、アキラのおかげですごく楽になったの。力を抜いて仕事するのを覚えたのは、今の部署に移されてからよ。それから見えたことも多かった。望んだ場所じゃなかったけど、気持ちに余裕を持ってやれてたと思う」

わかる気がした。彩芽が知っている理恵子はゆったりしていて、挫折ぶつちやなんて感じさせなかった。なのに何故急に？

「私を叩き起こしたのは、あなたなのよ」

カチツとつけられたライターの炎は高く長かった。それがろうそくのように燃えるのをボーッと見つめる。理恵子の言葉の意味が理解できたのは少し経ってからだ。

「……あたし？ ええ？ ええっ？」

跳び上がった彩芽に理恵子は笑っている。気づけば手のライターはすでに炎を収めたあとだ。手品みたい。

「先輩、からかってます？」

「まさか」

「だって。叩き起こすって……」

自分がいつそんなことしたつていうんだらう。瞬まばたきを繰り返す彩芽。それを見つめる理恵子の笑みは、一段と深まる。解けないパズルだ。その複雑な笑みは、どこまでも続く万華鏡の模様を彩芽に思い出させた。

## 二章 宝とゴミ

運転手付きの外車の後部座席は広い。

ほんやりしていた右生の視界に、ドアの取っ手がふと引つかかった。握りにまで細かな細工が施されているのをまじまじと睨んだあと、車内をぐるりと見渡した。天井、装備、内装にも贅を凝らしている。こんな車に自分が乗ることなど一生ないだろうと思っていたのに、いつの間にかそこにふんぞり返って違和感すら覚えなくなっている。いや、と思ひ直す。単に気に留めていなかったのだ。人も周囲もどうでもよかった。あの時から、深い水底に心を沈め何も感じないように生きてきた。

なのに突然気づいてしまった。今、目が覚めたみたいじゃないか。どうして。

答えを探すように隣を見ると、膝の上で両手を組み合わせて座る遼子の横顔があった。ドラゴンナイトから一週間も経たないのに雰囲気が変わった。厳しくキリキリしていた目元や口元が柔らかくなって、肌には艶まで出た。素顔を知っているからわかることだが、言ったら睨まれそうだ。

「元氣そうじゃん」

ちらりと右生を見て遼子がふふっと笑う。本当に機嫌が良いらしい。

「なんだ、いい男でも拾ったのか」

「拾った男なんてろくでもないのばかりよ。あなたみたいに」

「言ってくれるね」

「飽きないものは少ないわ。大事にしなきゃね」

「へえ。……旦那とか？」

根拠はないが直感的にそう思った。一瞬大きく目を見開いた遼子を右生は見逃さない。遼子があからさまに顔をしかめた。見透かされたのが気に入らなかつたのだろうが、

からかつたんじゃない。右生の本音だ。日頃世話になっているのだからパーティーのお供ぐらいお安いご用だが、遼子の行く先はお堅いところが多くて右生には退屈なだけだ。パーティーにエスコート役が必要だなんて、一体誰が決めたのか。欧米の真似ばかりしなくてもいいだろうに。

「彼は予定がぎつしりなのよ。今夜のパーティーは私の仕事」

「俺を連れてか」

「あら、あなたと行くパーティーは大抵仕事よ。知ってるでしょ」

言われるまでもない。遼子は自分の優越感のためにホストを連れ歩くような愚か者で

はなく、そこには必ずビジネス上の理由がある。遼子の夫もそれをよくわかってのことだろう。男女としての気持ちとは別のところで、ちゃんと互いのことを理解している夫婦だったのか。

「彼があなたによろしくって」

「……そりゃご丁寧に」

げんなりした顔を窓側へ逸らす。まさか遼子にのろけを聞かされるとは思わなかった。腐りながらぶつぶつ文句を言う。

「ホストに奥さん預けてどこ行っただか」

「この時期は秋へ向けていろいろ忙しいのよ」

「秋？」

「読書週間に興味があったかしら」

あるはずがない。遼子の笑い声が癢に障るが、こういう話題で勝てるとは思えない。おとなしく聞いてみる。

「今でもあるのか、そういうの」

「由来はどうあれ、今となっては出版業界のためにあるようなものよ。利用しない手はないわ」

「ふーん」

今夜の遼子は細い肩紐で吊ったクリーム色のドレス。彼女好みのシンプルなデザイン。胸元にドロップ形の宝石のついたネックレスが輝く。右生の凝視に首を傾げると、栗色の髪が肩からこぼれ落ちる。

「洒落たデザインのネックレスだな」

「装飾品にあなたが気を留めるなんて、初めてね」

「たまたま。アクセサリーは好きじゃないんだ」

「ピアスしてるくせに」

「穴あけちまったから仕方なくさ」

耳へと伸ばされた遼子の手を払うと、気を悪くもせずに遼子が笑う。

「放つとけばふさがるわよ」

「……ふさぐつもりはない」

低くなった声のトーンに遼子があら、と眉を上げた。

「理由は言わないのね」

気持ちが悪くまた水底へ沈んでいく。座席にもたれた右生は、答えを拒否するかのよう目を見せた。

横顔を眺めるのは遼子の番になった。その表情は、シャッターを下ろした店舗みたい

にとりつく島もない。右生には誰より近い遼子だが、過去はほとんど知らない。彼女の知る彼の生き方は、あらゆることに対して無関心、というのが特徴だ。その日暮らしとでもいうのか。『マンホール』で短い間に昇り詰めたことには驚いたが、時と共に最初から感じていたその印象は正しかったと思うようになった。ナンバー2から決して上らず、かといって落ちない。努力はしているだろうが、トップへの意欲を見せない。だからと過まぎす彼に苛いらだつことも多い。

稀まれに彼の本心に触れることがある。たとえばピアスだ。特に愛着がなさそうなのに、はずすことは拒む。「ふさぐつもりはない」のはピアスホールのことなのか、それとも心の穴？ 水を向けても語ろうとはしない過去。

耳たぶに光る銀のピアスを見つめながら、右生との出逢いを遼子は思い出していた。

どんな仕事にも接待は付きものだ。地位が上がればそのレベルが変わるだけ。大手出版社ていしや検書籍の編集長という肩書きとは別に、遼子には同社社長夫人としてのつきあいもあった。相手はいわゆる上流クラスのマダム達。

女性同士のややこしい感情のもつれは遼子の好むところではないが、裏事情の情報網として彼女達のそれが強力かつ最速なのは否定できない。そのため、誘われれば三度に一度はつきあうことにしている。その日もマダム達を『マンホール』へ案内し、大いに

面目を施した。

遼子と『マンホール』、というより『マンホール』のオーナーであるキングとのつきあいは長い。編集長とか社長夫人という肩書きがついてからはより有効に店を利用していたし、『マンホール』からしても彼女は上客であり、上の世界とのパイプラインでもあった。

女性達を表通りまで送っていく。『マンホール』のある路地は狭く、彼女達の車は入れないのだ。

「榆さん、楽しかったわ」

「今度お友達を連れて行ってもいいかしら」

「もちろん。彼らも喜ぶでしょうし」

「美形ぞろいだし、雰囲気も良かったわ」

「またね」

にぎやかなおしゃべりをそれぞれの自家用車が運び去ったあと、誰もいなくなった路上でホッとため息を吐く。ホスト達に持ち上げられおだてられて、マダム達は上機嫌だった。遼子自身も満足していたが気を使うことに違いはない。ホスト達の見送りを控えさせたのは、疲れた自分を見られたくなかったからだ。飲み直そうかしら。カッソとビールを踏み出した時だった。

バタバタと後ろから足音がした。反射的に振り返った遼子は、ビルとビルの中の路地へ誰かが飛び込んだのを見たような気がした。錯覚かと首を傾げるうちにまた足音。今度は複数あった。思わずバッグの中の携帯を掴んで身構える。歓楽街で採め事は珍しくないが、自分に火の粉が振りかかってきても困る。

バラバラと走ってきたのはいかにもチンピラ風の若者達だった。キョロキョロと何かを探している。

「ちっ、どこ行つた？」

「あの野郎」

「顔もハッキリ見なかったからな。いきなり蹴り喰らわせやがって」

「二、三発殴ってやったんだが」

「そこで遼子に気づいて走り寄ってきた。」

「おい、こちへ誰か来ただろ」

「隠すと承知しねえぞっ」

いきなりこういう脅しにくる輩はたいしたことはない。経験から知る遼子は冷静に視線を返す。

「そういえば後ろを誰か走って行つたかしら」

「逃げやがったな」

「追え」

あつさり離れて行つた背中を見送る。

「礼くらい言いなさいよ。ま、嘘だからお互い様か」

しらつとつぶやいたあと、遼子は路地へ歩み寄つた。今は編集長という立場だが、かつては記者として危ない取材もこなした身だ。物音ひとつしない路地を覗きこんだが暗くて見通せない。

「誰がいる？」

「止まれよ」

低い、でもまだ若い声だと思った。

「やっぱりいたのね」

「あんた、誰」

「通りすがりよ」

「通り過ぎろって」

「一応、助けてあげただけだ」

「そりやどうも。ついでに拾ってみるか？」

気軽に言われてたじろいだ。こちからはろくに顔も見えないし、やばいかもね。どうしよう。好奇心と老婆心で声をかけたけれど、ひどい怪我をしてるとかでもなさそう

だし。

「やめとくわ」

喉まで出かかった言葉を遮ったのは車の音だ。路地を掠めたヘッドライトに浮かび上がった姿の、何が自分に響いたんだろう。瞳なのか。表情なのか。耳に光ったピアスなのか。言うはずだった言葉の代わりに唇に乗せたのは、まるで反対の台詞だった。

「謝礼は一割じゃ足りないかもよ?」

何を考えてたのか今となつては自分でもわからない。気まぐれに過ぎなくても、それが右生と自分の縁だった。夫との関係にまで影響するなんて夢にも思わなかったのに。

「到着します」

運転手の声に頷きながら、遼子は我知らず微笑んでいた。

楡遼子といつて世間が思い出すのは、『楡書籍の社長夫人』と『老舗の純文学雑誌「蒼海」の編集長』のふたつの肩書き。それに見事な肢体と美貌、洗練されたファッションが付け加えられる。同性からは妬まれること請け合いだ。

有能でもある。「蒼海」の編集長になった時の大方の認識は「夫の七光り」「夫人のお遊び」、せいぜい「社長の気まぐれ」程度。彼女の編集者としての能力や経験を挙げる者などいかなかった。それから四年。「蒼海」は順調な売り上げを維持し続けている。不

況で休刊・廃刊する雑誌が後を絶たない昨今、彼女の手腕は広く認められていた。妻としてだけでなく、会社経営のパートナーとしての彼女の地位もまた揺るぎなかった。うるさいゴシップ屋がまき散らすスキャンダルなどものともせず、夫以外の人物を伴っていない問題にもならない。

とはいえ自分の退屈とは別の話。あくびをかみ殺す右生を、遼子が眉をひそめて睨んだ。「少しは営業スマイルを使ってくれない?」

営業、というあたりが遼子だ。

「ここで俺が営業できる奴っているのか?」

某一流ホテルの広間で、開かれているパーティーのタイトルは「私立教育を考える集い」。わかるようでわからない。出席者は私立の小中高校・大学経営者とその家族。関係者、大手出版関係者。さらに文科省からの来賓等々。多岐にわたるエグゼクティブな面々だ。誰も彼も肩書きの三つや四つぶら下げている。

「こういうところこそ、あなたの営業が効く人がたくさんいるわよ。お嬢様や奥様って駆け引きに免疫がないし。そのくせ危ない事が好きなんだから」

それを聞いた右生の表情はなかなか見られないあきれ顔。

「「マンホール」の営業をさせるために連れてきたって?」

「まさか」

「ならいいだろ。俺の顔がどんなでも」

「せっかく素敵な殿方とのがたにエスコートされるなら、羨ましがられないとつまらないわ」  
「よく言うよ。羨ましがられてるのはこっちだって」

遼子と一緒にだと実際、男性の視線がすさまじい。

「そりゃあんたの連れってのは光栄だけだな」

「嘘ばかり」

漏らす笑みの妖艶さにまた視線が集まる。

「とにかくエスコートはあなたの役目。ちゃんと応対するのよね」

「……了解」

軽くため息を吐くと、遼子は珍しく声を立てて笑った。

右生と遼子の関係について詳細を知る者はない。右生の金銭面を遼子が全てバックアップしているというのは周知の事実だが、そこに至る経緯は当人達とキングしか知らない。

初めて『マンホール』に連れて行かれたとき、ホストぐらいならできると高たかをくくっていた右生の鼻はな柱ばしらは、キングの言葉で叩き折られた。

『年に関係なく、自分と仕事にプライドを持つ奴としか仕事はしない』

『俺に、働いてほしいと言わせてみるよ』

『マンホール』でナンバー2の座を保ち続けるのはキングに対しての意地と、認められたいという願望からかもしれない。それもこれも遼子あってこそ。彼女には恩も義理もあった。だから望まればどこへでも行くが、連れ出されるのは興味のない場所ばかり。『マンホール』でまた下した端はの頃ばですらろくにキャッチもしなかったのだ。こんなところまで来て営業するわけがない。

そうは言っても義理は義理だ。意識を切り替えた右生はプロの営業スマイルに徹てした。ナンバー2は伊達だてではない。あつという間に彼の周りに群がる女性。まさしくハイエナのごとく？ と心で皮肉る。

「あなた、どこかの先生？」

「いや」

「出版関係でしょ」

「はずれ」

「まさかお役所？」

「まさかね」

「えー、じゃあ？」



「謎の方が面白いんじゃない?」

女性の機嫌を損ねずのらりくらは本職ならではの。そして不敵な笑みには必然的に黄色い声。

「右生」

沸騰直前の鍋に注がれた水みたいだと右生は思った。滑らかで艶のある声がかげられたその場は、まさしく水を打ったよう。一斉に振り向いた女性達が遼子を見て、顔を引きつらせる。

「今行く。じゃあ、よかつたら今度店にでも」

女性達の間をすり抜けながら素早く名刺を渡す。

「縁があつたら」

遼子と抜け出したその後ろで、また声があがる。

「……ホスト?」

「きやー、嘘」

「素敵!」

「えーっ?」

否定、憧憬、羨望、軽蔑。入り乱れる視線と声を置き去りにする。

「調子出てきたじゃない」

「たきつけたくせに。楽しい?」

「もちろん。だから連れてきてるのよ」

遼子らしいと思いつきながら歩いていると、横切った人影があつた。

「レン?」

思わず声にして目で追つたものの、そんなはずはないのはわかつていた。長い黒髪はともかく、柔らかな身体の線はどう見ても女性だ。興味を失つた右生のところへ、先に行つた遼子が戻ってくる。

「誰か知り合い?」

「いや」

「ちよつと挨拶に行くから。いらつしゃい」

「俺も?」

従つた先にさっきの黒髪女性がいた。五十代くらいの男と話している。遼子が小声で説明する。

「あの年配の男性が私立白砂学園の理事長よ。白砂英吾」

私立白砂学園は、いわゆる上流社会の子弟ばかり集めた学校だ。幼稚部から短大部まであり、相応の富裕層なら成績の優劣を問わずに受け入れてくれる。むろんかかる費用もその贅沢な施設とカリキュラムにふさわしい額らしい。そんな情報がすぐ浮かんでく

る自分に、苦笑いする。

「そばにいるのが愛娘。それこそ目の中にでも頭の中にでも即座に入れかねないわね」

「へえ。名前は？」

「小百合さゆり、だったかしら。谷間の白百合ならぬ、白砂の小百合」

「ふうん」

「さて」

本人達の手前までそんな危ない会話をかわしていたくせに、ピタリと口を閉じた遼子は無敵と呼ばれる笑みを浮かべた。

「白砂理事長」

振り返った彼の百面相ひやくめんそうを、右生は面白く見ていた。遼子を認めて顔を緩ませかけ、その横の右生に眉をひそめる。そして思い直し、ほどほどの笑みに転じる。あんまり腹芸はらげいのできるタイプじゃない。わかりやすい。

「これは楡くん。華やかな出で立ちに似合いの華やかな連れだね」

いきなり皮肉か？ 当然ふたりとも聞き流すだけ。

「お祝いを申し上げたくて。白砂学園は来年度、短大に加え大学部を設立なさるそうです。さすがですわね」

遼子の慇懃いんじんな誉め言葉に、白砂は控えめに返す。

「いや、親御さんからの要望は前々からあったんだが、四年制大学となるとなかなか踏み切れなくてね。二の足を踏んでいたんだよ。私も忙しい身だし」

「なのに踏み切られたのは？」

「人材だ。最も重要な中高等部を任せられそうな人物を見つけてね。お陰で私は大学部に専念できそうだよ」

「素晴らしいことですよ」

「ああ。教育にも情熱があるようだし、適任だと思っている」

「で、その方は？」

興味深そうな遼子の問いに、理事長が呼んだ。

「林田」

そばで談笑していた男が飛んできた。

「理事長、お呼びでしょうか？」

その物言いが卑屈ひくつに聞こえるのは右生だけだろうか。

「彼がそうだよ。林田、こちらは楡の社長夫人。と、お連れだ」

最後の微妙な言い回しに誰も頓着とんちやくしない。

「初めまして。お会いできて光栄です」

林田と呼ばれた男は、営業スマイルを途中で本気の笑みに変えながら、遼子に礼をと

つた。

「こちらこそ。理事長の期待の星でいらっしやるのね」

「とんでもない。僕のような新参者に期待して下さるのは嬉しいですが、まだまだ未熟で」

「ご謙遜でしよ？ これだけ理事長が推してらっしやるんですもの」

「ご期待に添えるよう努力します」

こっけいなくらい真面目に答える林田の耳に、クツと押し殺した笑いが届いたらしい。小馬鹿にしたような表情の右生に気づいて、顔を向けてくる。

「ごめんなさいね。連れが不躰で」

遼子がわずかに睨む。右生は鮮やかな笑みで林田を無視して、理事長へ向かった。

「申し訳ありません。僕は先ほどから理事長の至宝と聞き及んでおりますお嬢さんから目が離せなくて」

慇懃無礼にすら思える言い回しだが、その笑みで皆ごまかされる。しかし理事長は笑みよりもその言葉にごまかされたようだ。

「うまい表現だ。まさしく娘は私の至宝でね」

そう言いながら隣でおとなしく会話を聞いていた令嬢を引き寄せた。

「娘の小百合だ」

「榆さん、初めまして。お噂はかねがね伺ってます。ほんとにお綺麗」

見事に右生を素通りして遼子へ向ける挨拶は、この階級特有のプライドだろう。ツバメ風情に用はないとでも言いたげな傲慢さ。それを見て取ったのは、右生だったか遼子だったか。

「あら、こんな美しいお嬢さんに誉められるなんて。私こそお噂を伺ってますわ。理事長、有能な人材と至宝に、ご縁があるとか？」

小百合は頬を染め、白砂は浮かべている笑みを引きつらせ、林田は誇らしくも困った表情を見せる。三者三様。東照宮の三猿か。右生の心中、辛辣な批評を彼らは知るよしもない。

「もう君の耳まで？」

「お祝い事には誰もが敏感ですから」

「まだごく内輪の話なんだよ。全てこれからの彼の手腕次第かな。私を納得させてもらわないと」

「あら、期待の星なんでしょう？」

「至宝の相手としては、一番星でも足りなくてね」

親馬鹿とはこういうものか。右生はあきれた。言葉の内容にはなく、こういう場をそれを言うてのける神経に。林田の顔は神妙だが、苦さが漏れるのを必死に隠しているし、横の小百合はそれをただ見上げている。耐えよとも言いたげだ。その傲慢さに自

らは気づかない。察するに何の後ろ盾もない彼に、娘が一目惚れでもしたのだろう。手に入らぬものになかった彼女が初めて恋をし、人の心を欲したわけだ。それほどにも見えない奴なのに。俺の評価は関係ないか。だがどうやら遼子も同じ意見らしい。

「では林田さんはこれから死にも狂いですわね。こんなご褒美をぶら下げられては」「ええ、もちろんです。彼女はまさに至宝だ。それに比べれば僕はゴミでしたから」

こういう台詞を現実<sup>せりふ</sup>に聞こうとはね。バカらしさに右生は顔をそむける。

「あなたはゴミじゃなくてよ。もうこれまでのあなたじゃないの。生まれ変わったんだわ」「そうだ、生まれ変わった。自分以外は全て捨てて」

独り言のようなつぶやきが引つかかった。

「そりゃ凄<sup>すご</sup>い。捨てなきゃならないゴミがたくさんあったんですね」

右生の突っ込みに林田はギョツとして、言葉を詰まらせた。

「それは、どういう」

単に言葉尻<sup>ことばじり</sup>を捉えて皮肉ったつもり<sup>どう</sup>の右生は、その反応に驚く。林田がハツとした。

同時に向こうで「林田くん」と呼ばれる。

「す、すみません。ただ覚悟のほどを言いたかっただけで。失礼します」

あわてて立ち去る彼をすぐ小百合が追いかけた。遠ざかりながら彼女が口にした名前。

「修司さん」

修司？ 最近聞いたばかりの名前だ。

どこで。誰に？

別の誰かと談笑する林田修司に、小百合が寄り添っている。腰に回している彼の手に惜しげもなくかかる見事な黒髪が、甦<sup>よみがえ</sup>らせる声と言葉。

『彼は自分の、自分だけのものと信じていたのに』

自分以外は全て捨てたと彼は言った。

そうして彩芽も捨てられたのか。ゴミとして。

右生を見た遼子は驚いた。きつい嘲<sup>あざわら</sup>りの眼差しは誰に、何故、向けられているのか。

遼子さえも当惑させつつ、右生は修司を見つめ続けていた。

「これから大阪まで行かなきゃならないの」

遼子にそう言われ、パーティー会場を出たあと、ホテルに寄ることもなく帰った自宅<sup>みけ</sup>で、シャワーを浴びた右生は煙草<sup>たばこ</sup>をふかしていた。営業時間までもう少しある。ジムにでも寄ろうか。

ふと思いついたように耳からひとつピアスをはずした。銀の光と相まって星のようだとよく形容される。指名客なら誰でも欲しがるだろう。『ラバー』が身につける彼のピアスは、彼女達にとってステータスで周りからの羨望の的だったが、掌で転がしながら思い出すのは、そんな彼女達の自慢話じゃなかった。放っておけばふさがるピアスホールを、どうして自分はふさがらないのか。耳の隙間に今は空しさしか感じない。最初にこの穴をあけた時の痛みと喜びも、今では辛いだけだというのに、忘れられない女性の声。

『痛い』

ついあげた声。買ってきたばかりのピアッサーを手に、彼女が耳元を覗きこんでくる。

『ごめん。大丈夫？』

『結構痛いな』

『あたしは平気だったんだけど。あわてなくてもいいのに』

『実は初心者だからさ。勢いであけちゃわないとできなくなりそうだ』

『だからって無理にふたつもすることないし』

『俺のために作ってくれたんだろ？』

テーブルにはふたつのピアス。他人から見れば珍しくもない物でも、その時の自分に

とっては何より大事だった。

『なんたってあなたの最初の商品なんだから。そのうちプレミアアついたりして？』

『そんな訳ないでしょ』

せつせと耳を消毒してる彼女の頬が赤い。

『なんでさ。自分のブランド立ち上げたいんだろ？』

『そうよ。そうだけど、いつになるか』

『だから、俺が歩く広告塔。並べてつければ目立つし』

まだヒリヒリする耳に、さっさと始めこむふたつのピアス。

『ちよっ、右生、化膿しても知らないから』

『そんなに過敏体質じゃねえって』

『もう』

右生を見上げる彼女は困った弟を見るようっていて、恋人への仄かな媚びがあった。愛しくて落としたキス。心も身体も熱に浮かされていた。

知らぬ間に握りこんだ右手に痛みを感じる。広げれば掌に食い込むピアス。微かに滲んだ血を無造作に舐め取る。その味に別の顔を思い出す。

彩芽の耳にピアスをはめたやり方は荒っぽかった。それまでの『ラバー』にはモノを

渡しただけだ。どうして彼女だけ自分であけてしまったんだか。耳たぶに伝う赤い色と、舐め取った血の味。あの時の彩芽は迷子の子ようだったのに、ついこないだ——ドラゴンナイトの夜は、自ら踏み出そうとする強い意志を感じた。

震えても泣いても、前に進もうとあがく彼女に感じる焦り。

それに引きかえ、同じ場所から動かない、動けない自分。

あのピアスはとっくに捨てた。なのに別のピアスをし続ける。全てのことに関心のないつもりで、結局囚われている。忌々しい。自分も、あけたままのピアスホールも。

「……くそっ」

煙草たばこを揉み消した指ではめ直すピアスは過去を隠す武装というべきか。

俺はホスト、『マンホール』のナンバー2だ。過去はいらない。

自分に言い聞かせながら右生は部屋を出て行った。灰皿の吸い殻は粉々だった。

### 三章 噂きょうわくと驚愕

月が替わった最初の営業日は、店を開ける前に恒例のランキング発表がある。この日ばかりは留守がちなキングも必ず現れ、自ら結果を告げる。ホスト達にとっては晴れがましいと同時に、現実のシビアさを思い知らされる瞬間だ。

「皆よく努力している。このご時世だが、おかげで『マンホール』は順調だ。これからも競い合ってほしい。おまえ達の向上がそのまま店の売り上げになり、結果にもつながるのだから」

「ハイ」

いつもはやんちゃな連中も神妙な顔つき。通知票をもらう小学生の顔だ。

「ランキングを発表する。トップはトオル」

どよめきと感嘆と羨望せんぼうの中、トオルは至って冷静だ。

「次点はユウ。それからアキラ」

今度は深いため息。不動の三人を崩そうと誰もが躍起どつきになっているのに。

「キング！」

あがった声はマサシだった。

「それ、間違いないよね」

「生憎だったな」

唇を噛むマサシにキングは淡々としている。

「肉迫してきたのは確かだがな。おまえのやり方は派手すぎる。だが、周囲も煽ってく  
れたおかげで店の売り上げは三割増しだったぞ」

「ちえっ」

「ということでおまえが四位。テルが五位。レンが六位」

へえ、という声。先月まで五位はレンだった。テルの瞳が輝く。レンはといえば、予期していたのか穏やかな笑み。あとはケイ、ナル、ミチアキ、タカヤと続いた。トップ3は当然という態度でなんら表情を変えない。それがマサシには余計に悔しかったが、数字が示している以上文句は言えない。

トップのトオルにボーナスが出されると解散になり、開店準備へ各自急いだ。即座に手を加えられる場所は、ホストのランキングが掲示されている通路の一角。微妙に変わった順位を修正するが、トップ3がそのままなのであまり変わったように見えない。

「残念だったね」

テルがいかにも嬉しそうにマサシに絡んだ。

「悪かったな」

マサシが嫌そうな顔で睨む。

「開店前の採め事はレディーに感づかれるよ」

にこやかに割って入るレンにまで、テルは言う。

「やっとなにも一矢報いたよ」

他のホストならケンカになる台詞だが、レンは柔らかに受け止めるだけ。

「やられたよ。でも、次はこうはいかない」

マサシのような態度より、こうして微笑んで言われる方が迫力がある。テルの顔が引きつった。マサシはすでにいない。あまり怒らせてはまずいとわかっているのに、つい口にするのはテルの悪い癖だ。

「ねえレン、シエルグループの長男がもうじき、結婚するって？」

レンの表情が初めて変化を見せた。

「ふうん、情報通だね、テル。でも『マンホール』に関係ある？」

「『マンホール』にはないだろうけど。レンにはあるでしょ」

言外に知っていると言わせる。

「どういう？」

しらばっくれているのか表情は読めない。しかし言葉の後ろから圧してくるような空

気を感じ、まずいとテルは判断した。反応はあったし、即退散すべし。

「勘違いかな。さて仕事」

するつと逃げたテルの背中を、レンが凝視していた。

「セブillionブラッシュユロフォックス？」

右生とケイが珍しくペアでついた指名客から、その名前は出た。

「知らない？ 今人気あるのよ。このジュエリーブランド」

「へえ」

客のふたりがそれぞれ、ネックレスとブレスレットを見せてくる。独特で、凝ったデザイン。なかなかいいかとも思ったケイがそう言葉にすると、どちらも喜んだ。

「あんまり高くないの。同じデザインで今度、プラチナシリーズが出るんだって。値がはりそうだけど、欲しいんだ」

「そりゃ魅力的だよな」

相づちを打ちながらケイは訝しんだ。右生がじっとブレスレットに目を落としている。「ユウ？」

ケイもレディーの手元を覗き込んだ。ゴールドの平たい板をつないだブレスレット。その隅にブランドマークだろうか、キツネが刻印されていた。尾が七本。

「変わったキツネだね。どこのブランド？」

ケイの問いに答えたのは右生だった。

「シガラキだ。ジュエリー・シガラキ」

客にはわからない程度の動揺がケイには見て取れた。なんだ？ しかしすぐにそれは消える。

「ねえ、ユウのピアスはどこのなの？」

「ああ。俺のは」

聞かれたのを幸いに話題を転じた右生。ケイも逆らいはしなかったが、らしからぬ彼の様子が妙に印象に残った。

同じ日の夕方、仕事を終えた彩芽はまっすぐ帰途についた。体力を温存しないと水曜の後を乗り切れない。『ラバー』になってから他で遊ぶことは減った。そもそも派遣だし、正社員よりつきあいは気楽だ。

夏の蒸し暑さが、全身にまとわりついてくる。でもこれは残暑だ。もう九月。『ラバー』期間の記録は更新を続けているが、期限まで残り一ヶ月を切っている。

アパートに着くと郵便受けを開ける。ダイレクトメールや請求書の中に見慣れぬ封筒があった。不思議に思いながら手にした彩芽の全身が強張る。



箔押しのある真つ白な四角い封筒。「袖池彩芽様」の宛名は流れる筆文字。横にはおめでたい鶴亀の切手まで。恐る恐るひっくり返した彩芽は直後、目を閉じた。見たくない名前が、連名で。

「林田 修司」

「白砂 小百合」

何故。どうしてあたしに。誰が？

震える手で、それでも開けた招待状の華燭の典の日付は、三週間後に迫っていた。

九月最初の週は残暑が厳しかった。暑さはイライラやストレスを引き起こす。心の憂さを溜めたレディー達のお陰で『マンホール』は閉古鳥知らずだ。今夜の遼子は、髪をバレッタで首の後ろにまとめ流しただけ。パールのネイルが光る指が、カクテルグラスの足をしっかりとつまむ。

「こないだからマメだな。時間があるなら旦那と仲良くしてろよ」

「大きなお世話。顔を出さないとキングに怒られるし」

「まさか」

一笑に付す右生に遼子も笑む。

「今月はパースデーもあつたわね。いい加減にトップ取ってみせれば？」

右生が片眉を上げる。

「次点じゃ不満か」

「怠け者は嫌いだって最初に言ったでしょ。あなたこそ欲はないの？」

パールの爪がグラスを置くと煙草を取り出す。流れるような仕草で右生が火をつける。「欲、ね。ここでトップになったからって何が手に入る？」

動かない表情に遼子はため息みたいな煙を吐く。彼は変わらない。わかっているのにどこかで変わることを期待してしまふ。ホールに小波が広がるのを感じた。案内されていくレディーがふたりの目に映る。遠目ではつきりしないが歩き方が若々しい。

「新規ね。皆、張り切るわ」

「そうか」

その後ろにもうひとつ影があつたが、右生は振り返らなかつた。

新規のレディーの席へ向かっているのはレンだ。流れる黒髪が照明を弾いて、夜の河を思わせる。指輪にブレスレットにピアスに時計。装飾品において大抵のホストは女性に引けを取らないが、レンに限ってそうしたものを一切しない。時計だけは必要に迫られてだ。彼を飾るのは髪のみ。女性っぽく見えてもおかしくないのに、不思議と男性的な魅力も損ねていない。一目で欲しいと思わせる極上のホストのひとりだ。

「ようこそ、『マンホール』へ」

初めての客にかしずいた彼が、この呪文を笑顔で唱えた。相手は上流クラスの一員らしいが、レンの美貌に目を見張っている。客はもうひとりいたはずだ。首を回しかけて。「蓮<sup>れん</sup>」

左後ろから呼ばれた名は、ホストネームとしてではなかった。耳を疑う。まさか。振り返った彼は、驚きの声を漏らした。

「……美由木？」

化粧室にでも行っていたのか。ここで会うはずのない彼女が、脇をすりりと通って席に着いた。セミロングの髪は光が当たると赤みを帯びるブラウン。整った顔立ちだが、年齢よりも年下に見られがちなのは、汚れのない純粹培養ゆえ。彼女こそ、箱入りどころかその箱にリボンまでかけられるほどの良家の令嬢なのだ。

「どうしてここに」

レンが狼狽するのは珍しい。

「以前、乱<sup>らん</sup>さんがチラッと口にしたの。あなたの今のお仕事。たまたまここに來るって仰るお友達がいたから連れてきていただいたのよ」

まだ驚きの覚めぬ彼から、友達と呼んだ人へと美由木が顔を向けた。促<sup>うなが</sup>されるようにレンも改めて隣を見る。肩でくると巻かれた髪。身につけるもの全てが上品で洗練さ

れている。美由木よりも年上だろう。所作にもぐつと落ち着<sup>うかが</sup>きが窺えた。

「こちら、信楽<sup>しがらき</sup>さん」

「信楽？ もしかしたら」

「ああ、もちろんわかるわよね。ジュエリー・シガラキの社長夫人よ」

レンがもう一度驚いた。彼の記憶にある信楽社長は確か五十に手が届くほど。この女性はいくら落ち着いているとはいえ、三十歳そこそこだろう。そういえば、信楽社長はシンデレラを見つけたという噂があった。

「ご結婚なさってからずっとヨーロッパにいらしたのよ。ご自分でデザインをなさるの」「デザイナー？」

「ジュエリーデザイナー。彼女が出した商品はあちらでとても人気よ。日本でも発売が決まったので帰国されたの。すごいでしょ」

我が事のように喜び、心から賛辞を表す。そんな美由木に信楽夫人はとまどっているようだ。立场上、表面的なお世辞には慣れていても、こうしまっすぐな誉め言葉は対応に困るらしい。純なところを残しているのをレンは見取。やがて夫人は困惑を笑みに変えた。

「美由木さんにはほんとに敵<sup>かた</sup>わないわ。あなたみたいにストレートに物を言う人が上流社会にもいるのね。驚きよ」

「あら。どこの社会でも人間はたいして変わらないのではなくって？」  
 「そうかしら。ううん、やっぱり違うわ。あなたはそこで生まれ育ったからわからないのよ」

レンも心中同意した。確かに美由木はユニークだ。いろんな意味で。信楽夫人は続けた。  
 「ここは初めてだったはずでしょう。どう見ても懇意に見えるけど」

「あら。だって。彼は家族のようなものよ。乱さんの弟なの」

「美由木さん」

レンは顔をしかめた。まだ他のホストが来てないのが救いだ。

「乱さんの、つて貝津の？ 御兄弟？」

「信楽さま」

レンは穏やかな声で遮った。

「今夜の私は『マンホール』のホストです。ここではホストでしかありません。どうかお気になさらず」

自分のことは特に隠してはいない。この仕事をしていると、逆に知り合いに会うことも多いくらいだ。表立って誰も言わないだけ。どんな名家も、裏へ回れば叩かなくてもホコリやゴミが見つかる。自分もそんなホコリやゴミと同じ。信楽夫人は訳知り顔で口を止めた。頭の回転は速そうで助かる。

「美由木さんもうしたんです？ わざわざここまで来るなんて。乱兄さんに怒られますよ」

「だって。蓮にちっとも逢えないんですもの」

「こないだ逢ったばかりじゃないですか。結納の時に」

少し低くなったレンの声に、美由木の高い声がかぶせられる。

「あんなの逢ったんじゃなくてすれ違っただけよ。ろくに話してないわ」

「私に用でも？」

「用がなきゃ駄目なの？」

美由木の問いに、レンは静かに微笑む。

「じきに。式がくれば嫌でも逢いますし」

「嫌なの？」

「おやおや。今夜は絡みますね。せっかく遊びに来たんだから楽しんで方がいい。『マンホール』のホストは粒ぞろいですよ。初めてのレディーには皆が顔見せしますから」

信楽夫人に説明しながらレンは酒をつくる。美由木から目を逸らし、そのくせ飲めない美由木にはごく軽い飲み物をと気遣う。

「こういうところにはよく来られるんでしょうか？」

言葉はやはり、信楽夫人の方へ。

「いいえ。初めてなの、実は」

「おや」

違和感を覚える。美由木は言った。彼女が来ると聞いて連れてきてもらったと。

「どこかで噂でも」

「ここは確かに有名らしいけど……いえ、そうね、噂を聞いたの」

「なるほど。そうそう、できればファーストネームをお聞かせ下さいますか？ レディ

ーはそちらでお呼びするのがこの常つねですし」

「名前？ そうね。私の名前は」

「七尾ななお」

不意に、別の男の声が割り込んだ。信楽夫人が顔を上げ、レンの後ろを見つめる。その目が急速に熱を帯びるのがわかる。

「右生」

静かな沈黙の中、地雷を感じたレンは思わず息を潜め、身動きもできない。

「信楽さんもお知り合いが働いてらしたの？」

三者三様に固まっていたその場の空気を、美由木があっけなく壊した。クツと最後の蹴りをくらったように右生の表情も崩れる。瓦礫がれきに似た笑みしか残らない。

「そうだ。今は、シガラキ ナナオ、だよな」

一音一音突き立てるような呼び方。見知らぬ人の名前を呼ぶような口調だった。呼ばれた本人は動かない。右生を見つけて浮かんだ喜びの色はあつという間に消え落ちていく。それでも何らかの想いを抱えているように見える。右生はといえばすっかり営業の顔に戻った。いつもの彼だ。

「レディー方、『マンホール』へようこそ。俺はユウ。よろしく」

挑むように七尾を見て、それから美由木を見る。

「君は、レンの知り合い？」

止めようとするレンに構わず、美由木はあっさり答えた。

「初めまして。美由木です。蓮とは幼なじみなの」

「幼なじみ？」

意外すぎる言葉を右生が繰り返し、レンは額を押さえた。

「美由木さん。ユウはともかく他のホストには黙っててくれませんか？ 一々説明したくないし」

怒られたと思ったのだろう。美由木がうつむく。

「……ごめんなさい。嫌ならもう言わないわ」

「俺には説明してもらえないのか？」

右生が面白そうに問い質すと、珍しくレンは嫌な顔をした。

「しようがないね。彼女は幼なじみ。でもって、兄の婚約者」

「兄？ 貝津の？」

右生が自分の素性を知っているとは思わなかったレンだが、こういうことは知らぬ間に広まるんだな、と苦しいで頷く。

「そう。私の長兄」

「ふ……………ん」

改めて右生はレンと美由木を見比べた。ここで働いていると人の素性を見分けられるようになる。上流階級の誇り高さ、育ちといった、右生にとってはイヤミな香りは、美由木からも確かに嗅ぐことができたが、ありがちな傲慢さとか人を見下す態度は見えない。まっすぐな瞳だと思う。レンの方が逆に右生から目を逸らしてしまった。その意味は？ もしかしたら。

「右生」

無視された形になった七尾が苛立った声で呼んだ。彼女へ視線を移すと急に右生の瞳の温度が冷える。

「ああ、失礼。信楽夫人」

「やめて。その呼び方」

「それが今のあなたの名前でしょう？」

「あたしは、今も昔も七尾よ」

「あつひる。怯まない声。」

「逢いたかったの。あなたに逢いに来たのよ」

ギョツと膝の上で組んだ手をさらに握りしめながら、訴える目には力がこもっている。右生は肩をすくめると、ソファにもたれかかった。口調も冷えていくばかり。

「俺は逢いたくなかったね。今更」

七尾が黙る。右生はグラスを彼女の正面に掲げた。

「まだ言ってなかったな。ずいぶん経ったが、結婚おめでとう」

七尾が唇を囁んだ。

「信楽さんと昔からお知り合いだったの？」

間の悪い合いの手を、美由木は平気で挟んでくる。レンが申し訳なさそうな顔を向けてくるが、右生には美由木に答えている余裕がない。

「望んだものは手に入れたんだろう？ どうやら凱旋帰国らしいな」

「え？」

「セブンスブラッシュニューフォックス」

右生の口からその名が出るとは思っていなかったのだろう。七尾の目が大きく見開かれる。